

日本における「非西洋文化」へのまなざし —— 音楽科教育における「トルコの音楽」に着目して ——

Perspective on “Non Western Culture” in Japan.

岡崎 美 夏*

OKAZAKI Mika

abstract

I aim to reveal one aspect of perspective on "non Western culture" in Japan by analyzing how "Turkish music" is conveyed in school music education. As a method, I decide to analyze the magazine "Kyoiku-Ongaku" which is often used as a reflection of the voices in school music education. First, I analyzed separately for ① Turkish classical music, ② Sufism music, ③ folk music, ④ folk dance, ⑤ outdoor music, ⑥ folk songs, ⑦ Mehter, ⑧ others. "Turkish music" is diverse, and its diversity is reflected in the expression in related articles. In addition, there were many articles on musical instruments and analyzed in detail. 30 kinds of instrument names appear. For each common topic, it divided into 5 groups of ⑨ cognate musical instruments, ⑩ musical type, ⑪ information on musical instruments, ⑫ topics of performance now, ⑬ musical instrument name only, and revealed what is spoken.

1. はじめに

本研究は、日本における「非西洋文化」へのまなざしの一側面について、音楽科教育における「トルコの音楽」の伝えられ方を分析することによってその一端を明らかにすることを試みるものである。音楽科教育において、特に中学校では、「諸外国の様々な音楽」と

して「トルコの音楽」が扱われている¹。多くの人が「トルコの音楽」に出会う機会となっていることは間違いないだろう。そこで、音楽科教育現場の声の反映として活用されることが多い雑誌『教育音楽』²を分析の対象とし、「トルコの音楽」の伝えられ方、語られ方を分析することとした。1988年を国際理解が高まる一つの区切りとして捉え³、1988年4月号

¹ 学習指導要領（平成20年改訂版）では、「第1学年」、「第2学年及び第3学年」とともに、「内容」の項において、鑑賞教材として「我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうち、指導のねらいに適切なものを取り扱う」と記載している。また、教育芸術社の平成28年検定教科書においては、「中学生の音楽2・3下」の中で「世界の諸民族の音楽」として「メヘテルハーネ（トルコ）」が取り上げられている。

² 斎藤完・岡崎美夏（2011）「音楽科教育の現場におけるピアノ伴奏に対する認識」『教育実践総合センター研究紀要』31号 山口大学教育学部附属教育実践総合センター：pp.71-81

³ 平成元年度改訂の学習指導要領に関して「文化と伝統の尊重と国際理解推進をうたう（朝日新聞1989.02.11）」と新聞で解説された。

* 山口学芸大学

～2016年2月号までの『教育音楽 中学・高校版』を調査し、「トルコ音楽」に関する記事の内容を分析していきたい。

2. 関連記事

トルコの音楽に関する記述を収集し、関連記事は105件であった。記事の一覧は表1に記した通りで、掲載順に並べ記事番号を付けている。この記事番号は本稿で使用する。

表1 関連記事一覧

記事番号	年	巻号	記事名	ページ
1	1989	33(10)	特集 諸民族の音 教材化への視点 [西南アジア] アジア,アラブ諸国,北アフリカの三大陸を結ぶ広大な音楽文化圏	50-51
2	1989	33(10)	特集 諸民族の音 教材化への視点 [ヨーロッパ] 近代化の前と後—ヨーロッパ音楽文化の基層を問直す	54-56
3	1989	33(10)	特集 諸民族の音 教材化への視点 CDで聴く世界の民族音楽	66-68
4	1989	33(11)	高等学校 音楽科指導事例 音楽的視野を広げる/音楽概念を拡張する (2)	92-93
5	1990	34(2)	中学特集 民俗音楽の再発見 伝承スタイルからの触発 生活のなかの音に耳を澄まそう	40-42
6	1990	34(2)	高等学校 音楽科指導事例 音楽的視野を広げる/音楽をとらえ直す (2)	102-103
7	1990	34(3)	連載 シルクロードの音楽文化 3 アジアの楽器 ウード	61
8	1990	34(4)	表紙連載:シルクロードの音楽文化 4 アジアの楽器 ネイ	表紙
9	1990	34(4)	連載 シルクロードの音楽文化 4 アジアの楽器 ネイ	53
10	1990	34(5)	表紙連載:シルクロードの音楽文化 5 アジアの楽器 カースーン	表紙
11	1990	34(5)	連載:シルクロードの音楽文化 5 アジアの楽器 カースーン	59
12	1990	34(6)	連載:シルクロードの音楽文化 6 アジアの楽器 ナイ	81
13	1990	34(8)	中学校 第2学年音楽科指導事例 民族音楽の多角的学習法を考える (1)	104-105
14	1990	34(9)	連載:シルクロードの音楽文化 9 アジアの楽器 ダブ	68
15	1990	34(9)	中学校 第2学年音楽科指導事例 民族音楽の多角的学習法を考える (2)	102-103
16	1990	34(11)	表紙:シルクロードの音楽文化 11 アジアの楽器 ズルナ	表紙
17	1990	34(11)	連載:シルクロードの音楽文化 11 アジアの楽器 ズルナ	57
18	1990	34(12)	連載:シルクロードの音楽文化 12 アジアの楽器 ダブルカ	68
19	1991	35(1)	連載:シルクロードの音楽文化 13 アジアの楽器 アルゲール	79
20	1991	35(3)	表紙:シルクロードの音楽文化 15 アジアの楽器 ケメンチェ	表紙
21	1991	35(3)	連載:シルクロードの音楽文化 15 アジアの楽器 ケメンチェ	77
22	1991	35(5)	連載:シルクロードの音楽文化 17 アジアの楽器 チャルメラ	61
23	1991	35(6)	表紙:シルクロードの音楽文化 18 アジアの楽器 ズィル	表紙
24	1991	35(6)	連載:シルクロードの音楽文化 18 アジアの楽器 ズィル	72
25	1991	35(8)	連載:シルクロードの音楽文化 20 アジアの楽器 ナッカーラ	89
26	1991	35(9)	連載:シルクロードの音楽文化 21 アジアの楽器 グワンツ	21
27	1991	35(11)	連載:シルクロードの音楽文化 23 アジアの楽器 ドタール	83
28	1991	35(12)	連載:シルクロードの音楽文化 24 アジアの楽器 サパイ	60
29	1991	35(12)	高校特集 21世紀へのモーツァルト その教材性を探る 生徒も感じる きらりと光るモーツァルトらしさを探して モーツァルトの活用法	77-80
30	1992	36(2)	中学特集 「音楽史」再考—多様な教材をつなぐ視点	46-48
31	1992	36(4)	連載:シルクロードの音楽文化 28 アジアの楽器 シアオ	87
32	1992	36(5)	連載:シルクロードの音楽文化 29 アジアの楽器 ドーラク	57

33	1992	36(11)	楽しい授業をつくろう 中学校 第1学年音楽科指導事例 心に響く音楽を求めて アジアの音楽にふれよう—音楽の旅1—	100-101
34	1993	37(1)	連載：シルクロードの音楽文化 37 アジアの楽器 ルバブ	56
35	1993	37(2)	中学特集 アジアの音楽・日本の音楽 郷土の音楽を手がかりにアジアの音楽へアプローチ	43-46
36	1993	37(2)	中学特集 アジアの音楽・日本の音楽 音楽観を改めさせられた体験を思い出す	54-56
37	1993	37(3)	表紙：シルクロードの音楽文化 39 アジアの楽器 タンブール	表紙
38	1993	37(3)	連載：シルクロードの音楽文化 39 アジアの楽器 タンブール	56
39	1994	38(2)	彌政きょう介先生の授業を観る 基本練習からつなげて「ケチャ演奏ができちゃった」	23-27
40	1994	38(2)	連載 世界の音楽に親しもう 38 [実践紹介] インドネシア, スンダ地方の歌を歌おう	60-63
41	1994	38(3)	長谷川要子先生の授業を観る 一生に一度だけのチャンスかもしれないから	pp.9-13
42	1994	38(7)	連載：シルクロードの音楽文化 55 アジアの楽器 ヤンチン	59
43	1994	38(11)	鑑賞共通教材徹底研究 ここが聞きどころ 8 尺八曲「鹿の遠音」	56-57
44	1995	39(2)	表紙：シルクロードの音楽文化 62 アジアの楽器 カシユク	表紙
45	1995	39(2)	連載：シルクロードの音楽文化 62 アジアの楽器 カシユク	60
46	1995	39(5)	連載：シルクロードの音楽文化 65 アジアの楽器 ザルブ	67
47	1995	39(6)	高校特集 民族の響 アジア民族音楽の楽しさ	73-76
48	1995	39(6)	連載：シルクロードの音楽文化 66 アジアの楽器 ラチュエット	77
49	1995	39(8)	中学特集 アジアの音楽 伝統と現代 中東・地中海を東西に横切るアラブ諸国の音楽	60-62
50	1995	39(8)	連載：シルクロードの音楽文化 68 アジアの楽器 プーンギー	63
51	1995	39(9)	教音ジャーナル	34
52	1997	41(1)	高校特集 能動的「鑑賞」を可能にする授業の工夫 鑑賞教材の相対化を図り知的好奇心を喚起する	59-62
53	1997	41(9)	イベントを観る シルクロード音楽の旅(10) ファイナル	pp.1-4
54	1998	42(2)	教音ジャーナル	47
55	1998	42(5)	楽しい授業をつくろう 高等学校 音楽科指導事例 音楽の原点を探ろう(2)	98-99
56	1998	42(8)	中学特集 おススメの“創作活動” 世界の民族音楽で自ら主体的な音楽活動	55-58
57	1998	42(9)	連載 日本の伝統楽器に親しもう 第9回 箏篋	72-73
58	1998	42(10)	教音ジャーナル	43
59	1999	43(9)	高校特集 私のとっておきの「鑑賞教材」 (前編) 現代的な価値観に基づき鑑賞教材を精選し、「遊び心」というスパイスで味付けを	61-63
60	1999	43(9)	高校特集 私のとっておきの「鑑賞教材」(前編) 鑑賞を通じて何を学ばせるか～人間の生き方を知る	74-75
61	1999	43(10)	高校特集 私のとっておきの「鑑賞教材」(後編) 私の録って置き「鑑賞教材」	73-74
62	2000	44(8)	民族楽器 ライヴ・ミュージアム連載5 コブース	24-25
63	2000	44(10)	民族楽器 ライヴ・ミュージアム連載7 ウード	30-31
64	2000	44(11)	民族楽器 ライヴ・ミュージアム連載8 ズルナ	30-31
65	2001	45(3)	民族楽器 ライヴ・ミュージアム連載12 ダルブカ	34-35
66	2001	45(3)	連載 青島広志の音楽ノ解体新書88 機会のための(実用)器楽曲 13行進曲	92-93
67	2001	45(4)	民族楽器 ライヴ・ミュージアム連載13 世界珍妙楽器	34-35
68	2001	45(5)	表紙連載14 民族楽器ライブ・ミュージアム ナイ	表紙
69	2001	45(5)	民族楽器 ライヴ・ミュージアム連載14 ナイ	40-41
70	2001	45(11)	表紙連載14 民族楽器ライブ・ミュージアム ナイ	表紙
71	2001	45(11)	民族楽器 ライヴ・ミュージアム連載20 サズ	30-31
72	2001	45(11)	オーディオヴィジュアル 学校で使えるおススメソフト 中学校の音楽鑑賞(全15巻)世界の民族音楽(1)～(3)	54

73	2001	45(12)	民族楽器 ライヴ・ミュージアム連載21 ドゥーダ	30-31
74	2002	46(1)	表紙連載22 民族楽器ライブ・ミュージアム ラウト ラウトラ	表紙
75	2002	46(1)	民族楽器 ライヴ・ミュージアム連載22 ラウト ラウトラ	34-35
76	2002	46(3)	表紙連載22 民族楽器ライブ・ミュージアム ブズーキ	表紙
77	2002	46(3)	民族楽器 ライヴ・ミュージアム連載24 ブズーキ	30-31
78	2002	46(9)	高校特集 レッツ・プレイ!ワールド・ミュージック 音楽・出会いの旅～体験エスニック・サウンド～	67-69
79	2002	46(10)	教音ジャーナル	44-45
80	2002	46(12)	連載 民族音楽であそぼう 5 生活とリズム1 ブラジル・サンバパーカッションなどにみる、身の回りの生活 用品楽器(2)	88-89
81	2003	47(11)	連載 民族音楽であそぼう 16 西南アジアの変拍子(1)	84-85
82	2004	48(1)	連載 民族音楽であそぼう 18 オリエントの変拍子(1)	88-89
83	2004	48(7)	連載 民族音楽であそぼう 24 メロディ太鼓(2)	68-69
84	2005	49(6)	連載 教室に響け 世界の歌 6 トルコ民謡で遊ぼう	70-71
85	2006	50(2)	ヒット曲 フィーチャリング クラシック 11 カバーの果てに!行進できない『トルコ行進曲』	56-57
86	2006	50(4)	連載 教室に響け 世界の歌 16 ハンガリー・ロマ民謡のア・カペラ楽団	60-61
87	2007	51(2)	特集I 「曲種に応じた発声」を考える さまざまな国の歌を歌おう	35
88	2007	51(12)	中学特集 もっと身近になる!日本の音楽・世界の音楽 魅力あふれる世界の音楽に触れ幅広い音楽観を育てる	34-35
89	2009	52(11)	中学特集 世界の音楽を聴こう! 世界のさまざまな音楽に親しむ機会を～ブロック研究の取組みから	35-36
90	2009	52(11)	連載 生徒が育つ 鑑賞授業ここがツボ! 8 民族音楽(ハンガリー)の特徴を感じ取ろう	64-65
91	2010	53(2)	中学校 第2学年 音楽を一生の友だちに!	72-73
92	2010	53(2)	全日音研ニュース	85
93	2010	53(3)	中学特集 1年生の授業づくり【準備編】 「生徒と授業」「生徒と音楽」の関係づくりのために～授業管理と印象的な出 会いの演出	35-36
94	2010	53(3)	中学特集 1年生の授業づくり【準備編】 音楽好きな生徒を育てる鍵は、1年1学期の授業づくりから	37-38
95	2010	53(4)	高校特集 新学習指導要領への移行期!1年生の授業計画	45-48
96	2010	54(5)	シリーズ 授業ライブ・レポート LIVE!61 〈耳〉で育てる音楽力 トルコ行進曲のリズムを聴き取ろう	p9-13
97	2011	55(2)	連載 生徒が育つ 鑑賞授業 ここがツボ! 第23回民族音楽の特徴を感じ取ろう～民族音楽を素材とする音楽～	64-65
98	2011	55(12)	特集 私のイチオシ授業【高校編】 私のイチオシ 民族音楽の授業	38
99	2012	56(2)	連載 生徒が育つ 鑑賞授業 ここがツボ! 第35回民族音楽の多様な表現を味わおう～東アジア地域の弦楽器の音楽～	64-65
100	2012	56(3)	中学特集 「新しい評価」でつくる年間指導計画 【第3学年】新しい評価でつくる年間指導計画	32-38
101	2012	56(3)	連載 生徒が育つ 鑑賞授業 ここがツボ! 第36回民族音楽の多様な表現を味わおう～世界の管楽器の音楽～	64-65
102	2012	56(9)	まるごとWATCH! 和洋の楽器共演で蘇る平家物語の世界へタイムスリップ!	p1-3
103	2012	56(11)	特集 このネタで鑑賞のつかみはOK! この声は?どこの国・地域?	40-41
104	2012	56(12)	TOPICS	20
105	2016	60(1)	連載 授業に生かすアナリーゼ 鑑賞活動のヒント 第22回交響曲『第9番』前編(第4楽章) ベートーヴェン作曲	54-55

ここで登場頻度の高かった連載について言及しておきたい。柘植元一による「シルクロードの音楽文化」、若林忠宏による「民族楽器 ライヴ・ミュージアム」、「民族音楽であそぼう」、「教室に響け 世界の歌」である。これらの連載から関連記事が多く抽出された。まず「シルクロードの音楽文化」からは、24件の連載記事に加え、連載の本編と連動した表紙連載からも7件を関連記事として取り上げた。合わせると31件である。また、若林による「民族楽器 ライヴ・ミュージアム」の連載記事は10件、同じく連動した表紙連載から4件、「民族音楽であそぼう」から4件、「教室に響け 世界の歌」から2件の関連記事があり、合わせると20件である。このように、同じ執筆者による連載記事の情報で約半数の51件を占めている。

3. 関連記事の概観と分析の視点

関連記事を概観すると、「トルコの音楽」として紹介されているものは、表2に記すように、トルコ古典音楽、宗教に関わりのある音楽、民俗音楽など、その音楽の種類は多様

であった。

まずは、「トルコの音楽」がどのような内容で語られているのかという点を明らかにするために、音楽の種類という側面から分析をしたいと考えた。4.1で傾向分析を行う。また、全体を通して、「楽器」を紹介している記事が多く見られ、表3に記す通りその件数は60件と関連記事の半数以上である。

本稿では、特に「楽器」について着目することとし、4.2では楽器の登場頻度やその扱われ方を詳細に見ていきたい。

4. 分析

4.1 音楽の種類別に傾向分析

まずは、音楽の種類別に分析をしていきたい。本稿では、表2に記したように、①トルコ古典音楽、②メレヴィー教団、スーフィー派に関する話題、③民俗音楽、④民俗舞踏、⑤野外音楽、⑥トルコ民謡、⑦オスマン・トルコの軍楽（メヘテルハーネ、メフテル、）⑧それ以外と分け、詳細を見ていくこととした。④～⑥は③に含まれるという考え方もあるが、記事の中で「どう紹介されているか」と

表2 音楽の種類別にみる関連記事

音楽の種類	記事番号
①トルコ古典音楽（18件）	1,3,8,9,10,11,21,38,49,61,63,64,69,71,75,77,81,82
②メレヴィー教団,スーフィー派（7件）	1,3,8,9,25,68,69
③民俗音楽（2件）	21,71
④民俗舞踏（5件）	1,17,45,53,72
⑤野外音楽（4件）	1,16,17,32
⑥トルコ民謡（10件）	35,40,51,52,59,77,79,83,84,103
⑦オスマン・トルコの軍楽（メヘテルハーネ,メフテル）（28件）	1,2,3,4,13,17,25,28,29,30,39,41,60,64,66,85,87,88,89,90,91,92,96,97,98,102,104,105
⑧その他	55

表3 楽器に関する記事

	記事番号
楽器について（60件）	1,2,5,7,8,9,10,11,12,14,16,17,18,19,20,21,22,23,24,25,26,27,28,31,32,34,37,38,41,42,43,44,45,46,47,48,50,51,53,57,63,64,65,67,68,69,70,71,72,74,75,77,79,80,91,93,94,99,101,102

いう視点で分類している。なお、「楽器」に関する詳しい分析は4.2において行うが、音楽の種類によって用いられる楽器が異なることから、本項においても、それぞれの音楽に関係のある楽器という視点で言及する。

①トルコ古典音楽

トルコ古典音楽に関する記述が見られたものは、18件である。その内容は、ペルシア音楽を継承しているという話題(1,63,64,71)、名称のみのもの(3,61)、メレヴィー教団は古典音楽の担い手として貢献したという記述(1)、古典音楽の楽器に関する話題(8,9,10,11,21,69,75,77)、などであった。楽器についての話題は8件と多いが、具体的な楽器名称を見ていくと、カーヌーン(10,11)、ラウトラ(75)、ネイ(8,9,69)、ケメンチェ(21)と、記事によって様々である。また、音楽を表す表現として、「繊細なトルコ音楽」(49)という表現や、拍子について述べているもの(81,82)、マカームや微小音程について(38,49)など具体的な特徴を述べているものもあった。

トルコ古典音楽に関する話題としては、18件のうち「ペルシア音楽を継承している」という話題が4件、楽器のネイについての話題が3件と、共通の話題も少しずつは見られたが、基本的に共通項が少なく、記事によって内容は様々であった。

②メレヴィー教団, スーフィー派

メレヴィー教団の話題が見られたものは、7件であった。その内容は、スーフィー神秘主義の儀礼に用いられる楽器についての話題が中心である(8,9,25,68,69)。中でも、ネイについては「最も崇高な楽器(69)」、「宗教儀礼に用いられる楽器としても重要な役割を果たしている(8,9)」、「スーフィー神秘主義儀式音楽の主役にもなりました(68)」といった記述が見られた。その他の楽器の話題とし

ては、中型の釜太鼓、クデュム(25)についてである。また、スーフィー派の旋回舞踏の楽曲を紹介しているもの(3)、メレヴィー教団について、「トルコ古典音楽の事実上の担い手としてその展開に大きな貢献をした(1)」という記述もあった。

メレヴィー教団、スーフィー派の話題としては、7件中5件が楽器の話題であり、そのうちの4件は「ネイ」に関するものであった。

③民俗音楽

「民俗音楽」として言及のあったものは2件である。1つは楽器の話題として、カラデニズ・ケメンチェが「もっぱら、この地方の民俗音楽に用いられる(21)」と記述されている。またもう1件は、トルコ音楽には古典音楽と民俗音楽の二系統があるという話題で、「トルコ民俗が中央アジアで遊牧生活をしていた頃から受け継いできた民謡などの民俗音楽(71)」と説明されている。

④民俗舞踏

「民俗舞踏」として言及のあったものは5件である。カシユクを紹介する記事に掲載された写真の説明として「トルコの民俗舞踏(45)」と記述されている。また、トルコ伝統舞踏芸術団による現代における披露の話題として「トラキア地方の踊り」、「地中海地方の踊り」、「トロス地方の踊り」などが挙げられていた(53)。また、鑑賞の話題の中で「トルコの黒海の踊り(72)」も見られた。また次項の「野外音楽」とも関連するが、野外音楽の「喧噪な音響に合わせて人びとが行列をし、民俗舞踏を踊るのである(1)」や、「人びとは野外で祝いの民俗舞踏を終日踊る(17)」というように、現地の人々の民俗舞踏の様子がわかる記述も見られた。

⑤野外音楽

「野外音楽」として言及のあったものは4件である。野外音楽に関しては、楽器のズルナ

やダヴルと関連した話題や、庶民の祭りや祝い事などの関連について記述されている。まず楽器について、ズルナは「古来、野外音楽の重要な担い手であった (16,17)」という記述や、「ダヴル、ズルナを欠いた婚礼は不完全」(17,32) というトルコの諺も紹介されている。また、「野外音楽は庶民の祭りや祝い事に欠く事のできない音楽 (1)」、「野外音楽が村の共同体の『ハレの日』に如何に重要であったか (32)」という記述のように、祭りや祝い事に関する説明が中心のものもあった。

⑥トルコ民謡

「トルコ民謡」として言及のあったものは10件である。様式に関する話題として、ウズン・ハワとクルク・ハワについての話題がある。これらは、「前者は拍子がなく、後者は拍子がある (35)」や「前者はいわゆる自由リズムの歌で、後者がビート感のある歌です (83)」のように記述されている。また、ウズン・ハワについては、演奏曲目として記載があるもの (51)、名称のみ記載されているもの (59,103) もあった。トルコ民謡の表記のみのもの (52)、トルコ民謡の具体的な曲名として『ウスクダラ』も見られた (40,84)。楽器の話題として、「トルコの民謡弦楽器サズ (77)」と書かれているものもあった。また、トルコ民謡について「メロディが下行して終わる (84)」という具体的な音楽の話題や、書籍紹介の記事の中で「トルコの民謡が泥臭くなく、むしろ爆発的・熱狂的に人びとに愛され、日々の生活に生きている (79)」といった記述のように、現地の人との関係性が伺えるものもあった。

⑦オスマン・トルコの軍楽 (メヘテルハーネ、メフテル)

「オスマン・トルコの軍楽」への言及は28件に見られた。いろいろな表記が見られたが、オスマン・トルコの軍楽、トルコの軍楽、メ

ヘテルハーネ、メフテルと表現されている。では、具体的な内容を見ていきたい。まずは、トルコの軍楽を紹介する類いのものである。「この種の野外音楽の最も大規模に発達したのが、オスマン・トルコのイェニチェリ (精鋭近衛軍団) が伴った軍楽隊である (1)」と記述されている。またヨーロッパへの影響について「このトルコの軍楽隊はヨーロッパ諸国に取り入れられ (中略) 18世紀～19世紀ヨーロッパの古典音楽の『トルコ音楽』が形成されたのである (1)」や、「トルコの軍楽に胆を潰していたころのヨーロッパには(2)」などの記述が見られた。これに関連して、ブラスバンドの祖であるという記述や (2,3)、ジブシーブラスのルーツであるという記述 (104)、ヨーロッパの《トルコ行進曲》との関連の内容もいくつか見られた (2,4,13,29,30,66,85,90,96,97,105)。楽器の話題としては、メヘテルハーネの楽器編成について、ズルナからチェヴガンまで6種類の楽器名を挙げているもの (17) や、ズルナ (2,3,64)、キョス (25)、チェヴガン (28) など個々に楽器名が登場するものもあった。また、曲名や表記のみで登場しているものもいくつか見られたが、鑑賞教材として《ジェッティン・デデン》を挙げているもの (41,87,88,89,98,102)、「メフテル」もしくは「メヘテルハーネ」と表記しているもの (39,89,91,96,97)、コンサートや研究演奏の曲目として《ジェッティン・デデン》が記載されているもの (92,102)、オーディオ紹介で記載があるもの (60) などがある。

軍楽に関する記述は、他のものに比べて登場頻度が高かった。ヨーロッパへの影響に関する話題や、そこから派生したものとして《トルコ行進曲》との関連も多かった。特に《トルコ行進曲》の話題は、鑑賞教材として実践的な話題であることが多く、また、《ジェッティン・デデン》や「メフテル」を鑑賞教材

として挙げているものも9件見られた。このように、軍楽の話題は音楽科教育の実践的な内容と結びついている印象である。

⑧その他

口笛語の話題があった。「トルコのクシコイ村にのみ現存し、音程とリズムでトルコ語を吹分ける (55)」と記述されている。

4.2 楽器の登場頻度とその内容

次に「楽器について」詳細に分析していきたい。本稿では、トルコの楽器と明記されているものを対象とした。同じ名前の楽器でも、他の国や地域で用いられていることもある。

そのため、以下に取り上げている楽器が登場していても、他国における話題のものは対象から外している。

楽器の種類は30種類もあり、その内訳は表4の通りである。登場頻度の高いものから、ズルナが13件と多く、次にネイ (ナイ) は8件、サズ (サーズ) は6件、ダルブカは5件であった。

様々な楽器が登場し、中には1度きりの登場で頻度の少ないものもある。登場頻度の高いものほど、「トルコの音楽」にとって重要な楽器ということであろうか。どちらにしても、頻度の高いものほど印象に残りやすく、

表4 楽器について

楽器名	記事番号
ズルナ	1,2,16,17,22,32,41,47,53,64,91,93,94,101
ネイ (ナイ)	8,9,31,43,68,69,79,101
サズ (サーズ)	27,70,71,72,77,102
ダルブカ	5,18,46,65,71
ダウル	1,17,32,53
ケマンチェ (ケメンチェ)	2,20,21,53
カシユク	5,44,45,80
ウード (ud)	7,63,71,99
メイ	26,51,57,101
サントゥール	11,42,99
ズイル	17,23,24
タンブール	37,38,67
カーヌーン	10,11
キョス	17,25
ナツカーレ	17,25
チェヴガン	17,28
チフテ	19,50
ズイッリ・マシャ	24,28
デュンベレク (ドゥンベレキ)	46,65
ジュラ	67,71
ラウトラ	74,75
バーラマ	2
ムースイカール	12
ダブ・ダッフ・杵太鼓	14
ボル	17
クデユム	25
チャガナ	28
ラバーブ	34
カイナナ・ズルルトス (グルグル)	48
セマイ	72

人の目に触れる機会、受容の機会も増える。では、楽器についてどのようなことが語られているのか、共通の話題という側面で分け、見ていくこととする。本稿では、⑨同族の楽器、⑩楽器に関する情報、⑪現代における演奏の話題、⑫楽器名のみの記事、この4つの観点に分けた。それぞれ具体的な内容を見ていきたい。

⑨同族の楽器

トルコの楽器として紹介されているものは、現代における西洋の楽器の祖先であるということや、日本を含めた他の国の楽器と同族であることも多く、そのことに関する記述が多く見られた。同じ楽器でも、記事によっては同族として紹介される楽器が異なることもあった。一つの楽器について、同族の楽器がいくつもあるからである。表5には、同族の楽器や、そのルーツを語る内容が見られたものをまとめている。

この中で頻度の高い記述は、「ズルナ」と「オーボエ」の関連について5件、「メイ」と「箏」の関連について4件、「ズルナ」と「チャルメラ」の関連について3件、「ネイ」と「尺八」の関連について2件である。オーボエや日本の楽器など、日本人が想像しやすい楽器との関連が頻度の高い傾向にある。ただし、日本でも認知度の高い「バイオリン」と同族として挙げられている「ケマンチェ」の話題は1件しか見られず、例外があることは留意しておきたい。

⑩楽器に関する情報

ここでは、上記2つの項目以外で、楽器に関する情報について記述されているものをまとめている。例えば、楽器の構造や、素材、演奏の仕方、音色についてなどである。表6には、それぞれの項目に関して言及の見られたものを記事番号で記している。また、楽器を紹介する目的で、日本語の楽器の種類名や、

表5 同族の楽器について

楽器名	ルーツ・同族の楽器 ※ () 内は記事番号
ズルナ	オーボエの原型のズルナ (2,16,17,47), オーボエのような2枚リードの楽器 (101), インドではシャハナーイ (17), 中国ではスオナ (17), 朝鮮半島ではテーピョンソ (17), 日本ではチャルメラ (17,22,64), 南欧ではシヨルム、シヨーム、シャルマイ (64)
ケマンチェ(ケメンチェ)	バイオリンは、トルコのケマンチェの流れをくむ (2), ギリシアのケメンチェ (21)
バーラマ	ギリシアのブズキはトルコのバーラマから (2)
ダルブカ	ザルブに近い太鼓 (46)
ウード (ud)	琵琶の仲間の楽器 (99)
ネイ (ナイ)	尺八と同族の楽器 (43), 尺八のような縦笛 (101)
サントゥール	ハンマード・ダルシマーと総称される西洋琴は、サントゥールが西斬したものと考えられる (42),
ナッカーレ	ティンパニの祖先 (25)
チフテ	ダブル・クラリネットの仲間 (28)
ズィツリ・マシヤ	チャガナは今日のズィツリ・マシヤ (28)
メイ	中国のグワンツと同族 (26), 日本の箏と同族 (26,51,57), 箏と形状が似ている (101), オーボエのような2枚リードの楽器 (101)
サズ (サーズ)	ドータルと同族 (27), ギリシアに伝わったサズの一種にブズーキ (77)
チャガナ	ズィツリ・マシヤのこと (28)
デュンベレク(ドゥンベレキ)	ザルブの親戚と考えていい (46)
カイナナ・ズルルトス (グルグル)	ラチェットの仲間 (48)
ジュラ	サズの小型 (71)

西洋の楽器に言い換えているものもここでまとめておく。

これらに該当する記事は、カシユクのこと
に言及している記事番号5以外は、全て「2」
で言及した連載記事によって語られている。
楽器や記事によって説明や紹介される情報項目
は異なり、一様ではない。また、日本語で
表す「擦弦楽器」や「気鳴楽器」などの記載や、
ボルをラッパ、キョスをティンパニー、ズイル
をシンバルといったように、西洋の楽器に
言い換えて説明をしているのも興味深い。

⑪現代における演奏

ここでは、現代における演奏の話題が見ら
れたものを分類した。「イスタンブールの軍
事博物館を訪れる人には、チェヴガンの実演
をつぶさに観察する機会がある。毎日曜日の

午後三時から、往年のメヘテル（オスマン・
トルコの軍楽）の楽器とレパートリーによる
ミニ・コンサートを、観光客のために行って
いるからである（28）」のように、現地での
演奏の話題や、現地のアーティストが日本で
公演を行った時の話題（53）もあり、ケメン
チュエ、ズルナ、ダブル、サーズなど楽器が登
場したようである。また、日本人奏者の日本
での演奏の話題として、メイ（51）や、サズ
（102）も見られた。DVD鑑賞の話題の中で、
サズ・セマイ形式の合奏が人気であった（72）
という記述もあった。

⑫楽器名のみ

なかには、楽器名のみ登場しているものも
あった。表7に記事番号を記しておく。

表6 楽器に関する情報

	構造,形状	素材	奏法	音色	種類など	言い換え
ズルナ	64		17		複簧をもつ管楽器 (16,17), ダブル・リード管楽器 (64)	
ケマンチュエ	21	21	21		擦弦楽器 (20,21)	
カシユク	5,44,45,80	5	5,44,45,80	44,45		
ダルブカ	5,18,	5,18			片面太鼓 (18)	
ウード	7	7				
ネイ(ナイ)		9	9,69		気鳴楽器 (8,9)	
カーヌーン	11	11	11	11	弦鳴楽器 (10,11)	
サントウル		11			撥弦楽器 (11)	
ボル						ラッパ (17)
キョス						大型のティンパニー(17)
ナッカーレ	25	25			片面太鼓 (25)	小型のティンパニー(17)
ズイル						シンバル (17,23,24),金属 製のカスタネット (24)
チェヴガン	28	28	28		体鳴楽器 (28)	錫杖の一種 (17)
ズイッリ・マシャ			24			シンバル (24)
クデム			25		釜太鼓 (25)	中型の釜太鼓 (25)
メイ	26					
サズ	70					
チャガナ	28					
ラバーブ	34	34				
タンブール	38,67	38			弦鳴楽器 (37,38)	
ジュラ	67					
ラウトラ					弦楽器 (74)	

表7 楽器名のみ表記されている記事

	記事番号
ズルナ	32,93,94
ダウル	32
ダルブカ	65
ウード (ud)	63
ネイ (ナイ)	31,79
ムースィカール	12
ダブ・ダッフ・杵太鼓	14
チフテ	19
デュンベレク (ドゥンベレキ)	65

4.3 その他

ここでは、音楽の種類別に分析するという側面と、楽器に関する内容を分析するという側面のどちらにも該当しなかったものをまとめておきたい。以下に列挙した。()内は記事番号である。

「トルコの音楽」というワードのみ (6)。ハンマー・フリーゲル (トルコ・ピアノ) にトルコの影響をかいま見ることができた (15) という記述。指導計画の表において、「アジア地域の音楽を知ろう」の中に「トルコの民族音楽を鑑賞する」と表記されている (33)。アジア音楽の体系の表の中で、西アジアの系統に「トルコ」(36)。「トルコの音楽を彷彿とさせるような」という表現 (54)。鑑賞を通して学習した民族的な音階を用いて、即興的なアンサンブルを楽しむ活動を紹介している。その中の音階の一つに「トルコ」があり、「マーチのリズムによって順次進行の旋律を作る」という説明が加えられている (56)。CD「アーゴ民族音楽シリーズ」を紹介しており、国名が列挙されている中に「トルコ」がある (58)。アフリカの楽器コブースを紹介する記事の中で、「トルコの弦楽器が伝わったものだ」という現地の人から聞いたという話題を記述している。しかし、それを裏付ける正確な情報はまだ得られていないとし、「トルコ起源の謎」として締めくくられている (62)。トルコ系とモンゴル系の遊牧民族が馬や羊や山羊などの頭を楽器の部分に象る習慣があるという話題から、「トルコ、イランなどの楽器にその習慣が少ないのは、『神の創造物を人間が模造してはならない』というイスラムの教えが中世以後定着したからと思われます」と見解が述べられている (73)。ギリシアの楽器「ブ

ズーキ」について、「オスマン・トルコの長い支配から独立した際、トルコ生まれのギリシア人移民たちによって持ち込まれました」という記述がある (76)。指導計画の表の中に「トルコ」(78)。「トルコ音楽」という表記のみ (86)。指導計画の表の中で、アジアの音楽の中の「トルコ」(95)。指導計画の表の中に「トルコ音楽」(100)。

5. まとめにかえて

ここまで、『教育音楽 中学・高校版』における「トルコの音楽」の語られ方を見てきた。明らかになったことを、ここで整理しておきたい。

「トルコの音楽」と一言で言っても、多様であり、その多様さが関連記事における表出の仕方に反映されている。本稿では、①トルコ古典音楽、②メレヴィー教団、スーフイー派の音楽、③民俗音楽、④民俗舞踏、⑤野外音楽、⑥トルコ民謡、⑦オスマン・トルコの軍楽、⑧その他のように、関連記事に登場したままに分類し、分析を行った。ここで、『新訂 標準 音楽辞典』の「トルコの音楽」の項でどのように紹介されているか見てみたい。小柴によると「(1)民謡と民俗音楽、舞踏、(2)イスラム神秘主義と音楽、(3)古典(芸術)音楽、(4)オスマン・トルコの軍楽」の4つに分けている⁴。これと本稿の分類を照らし合わせてみると、(1)と③④⑤⑥、(2)と②、(3)と①、(4)と⑦がそれぞれ対応しており、(1)～(4)の全てにいずれかの項目が該当している。このことから、『教育音楽 中学・高校版』において「トルコの音楽」として登場する音楽の種類は、全体を概観すると——頻度に差はあるものの——「トルコの音楽」を網羅していると捉えてよいだろう。しかし、一つ一つの記事単位で見ると、どれかに限定して語られていることが多く、1件の記事ごと

⁴ 小柴はるみ (1991)「トルコのおんがく」『新訂 標準音楽辞典』音楽之友社 pp.1261-1262

に「トルコの音楽」の全体像を理解するのは難しいことは留意すべき点である。語られている内容の偏った点を挙げるとすれば、「オスマン・トルコ」の軍楽についての話題が他の分野に比べて若干多いことである。その内容はヨーロッパへの影響の話題や、《トルコ行進曲》との関連、鑑賞曲としての《ジェッティン・デデン》の話題が多く見られた。

また、楽器に関する内容は60件の記事に見られた。これは、関連記事の半数以上である。「2」で取り上げた連載が、楽器について紹介する内容で長くにわたり掲載されていたこともあり、トルコに関する楽器だけでも30種類と多くの楽器名を見ることができた。楽器に関する内容については、どのようなことが語られているのか共通の話題という側面で、⑨同族の楽器、⑩楽器に関する情報、⑪現代における演奏の話題、⑫楽器名のみ登場の4つに分け、関連事項を表で示しつつ具体的に見ていった。シルクロードを通じて、世界中に楽器が伝えられたこともあり、同族の楽器に関する話題や、どんな音楽に用いられるかという話題が共通項としてよく見られた。また、楽器の外観や仕組み、素材や音色など、基本的な楽器に関する情報も見られた。

以上のことが、本稿の分析から明らかになった。雑誌『教育音楽 中学・高校版』において「トルコの音楽」は、アジアの音楽や民族音楽に関する連載が組まれている事もあり、少量ながらも長期にわたり継続して専門的な内容が語られている。「トルコの音楽」は、

日本においてあまり馴染みがないといってもよい。少なくとも日常的な音楽ではないのは間違いないだろう。その事実の反映、つまり、あまり知られていないことであるために専門的な内容が必要ということの表れのようにも感じる。

本研究では、紙面からの情報を分析することで「トルコ音楽」についてどのように語られているかということをはっきりとした。ここで一つ気になるのは、実際にはどのように受容されているのかということである。以下に引用する音楽教育現場の実践的な報告の中で、「トルコの音楽」について気になる表現が見られた。

歌唱、鑑賞を通して学習した民族的な音階を用いて、即興的なアンサンブルを楽しむ活動を行った。生徒が取り上げた民族的音階は資料3のようなものであった⁵。

資料3 (抜粋) トルコ・・・マーチのリズムによって順次進行の旋律を作る

歌唱、鑑賞を通して学習した民族的な音階の一つとして、トルコは「マーチのリズムによって順次進行の旋律を作る」と表現されている。「マーチ」ということから、軍楽を想起させるが、「トルコの音楽」を正しく理解しているとはいえない。実際にどのように受容されているのかという点は、今後明らかにしたい課題として挙げておきたい。

⁵ 中村雅夫 (1998) 「世界の民族音楽で自ら主体的な音楽活動」『教育音楽 中学・高校版』第42巻第8号 音楽之友社 pp.55-58

引用文献

- 江波戸昭（1989）「特集 諸民族の音 教材化への視点『ヨーロッパ』近代化の前と後—ヨーロッパ音楽文化の基層を問い直す」『教育音楽 中学・高校版』第33巻第10号 音楽之友社 pp.54-55
- 柘植元一（1989）「特集 諸民族の音 教材化への視点 『西南アジア』アジア,アラブ諸国,北アフリカの三大陸を結ぶ広大な音楽文化圏」『教育音楽 中学・高校版』第33巻第10号 音楽之友社 pp.50-51
- 柘植元一（1990）「シルクロードの音楽文化 4 アジアの楽器 ネイ」『教育音楽 中学・高校版』第34巻第4号 音楽之友社 p.表紙
- 柘植元一（1990）「シルクロードの音楽文化 連載 4 アジアの楽器 ネイ」『教育音楽 中学・高校版』第34巻第4号 音楽之友社 p.53
- 柘植元一（1990）「シルクロードの音楽文化 11 アジアの楽器 ズルナ」『教育音楽 中学・高校版』第34巻第11号 音楽之友社 p.表紙
- 柘植元一（1990）「シルクロードの音楽文化 連載 11 アジアの楽器 ズルナ」『教育音楽 中学・高校版』第34巻第11号 音楽之友社 p.57
- 柘植元一（1991）「シルクロードの音楽文化 連載 15 アジアの楽器 ケメンチェ」『教育音楽 中学・高校版』第35巻第3号 音楽之友社 p.77
- 柘植元一（1991）「シルクロードの音楽文化 連載 24 アジアの楽器 サバイ」『教育音楽 中学・高校版』第35巻第12号 音楽之友社 p.60
- 柘植元一（1992）「シルクロードの音楽文化 連載 29 アジアの楽器 ドーラク」『教育音楽 中学・高校版』第36巻第5号 音楽之友社 p.57
- 栢谷隆男（1998）「楽しい授業をつくろう 高等学校 音楽科指導事例」『教育音楽 中学・高校版』第42巻第5号 音楽之友社 pp.98-99
- 若林忠宏（2001）「表紙連載14 民族楽器ライブ・ミュージアム ナイ」『教育音楽 中学・高校版』第45巻第5号 音楽之友社 p.表紙
- 若林忠宏（2001）「民族楽器ライブ・ミュージアム 連載14 ナイ」『教育音楽 中学・高校版』第45巻第5号 音楽之友社 pp.40-41
- 若林忠宏（2001）「民族楽器ライブ・ミュージアム 連載20 サズ」『教育音楽 中学・高校版』第45巻第11号 音楽之友社 pp.30-31
- 若林忠宏（2004）「連載 民族音楽であそぼう 24 メロディ太鼓 (2)」『教育音楽 中学・高校版』第48巻第7号 音楽之友社 p.68-69

〈著者略歴〉

岡崎 美夏

音楽教育学（修士）。現職山口学芸大学非常勤講師。